

佐佐木幸綱歌集

『春のテオドール』

(ながらみ書房)

『テオが来た日』(二〇二〇年刊)に続く十八歌集。愛犬テオドール(通称テオ)が多く詠まれている。ひらがなの多用は、歌の速度を緩やかにする工夫だとある。

三十キロをこえて少年らしくなりソフ
アーにぐいとわりこんでくる

テオは五歳。体重は三十六キロになるそ
うだ。体の成長とともに家族の一員として
の自信がつき、作者が寛くソファーに割り
込んでくる図々しさが微笑ましい。

おもいつきたることあるらしく二階か
らいそぎおりくるテオとであえり
中学校のかなあみの際に見つけたるテ
ニスボールにテオはこだわる

犬は、人間には分からぬ微細な匂いや音
の世界を生きる。故に人間が思いもよらな
い物事に深く喜び、執着するようだ。

立春はまださむけれど春は水にきてい
てテオの目にも見えるらし

テオの目を通して、かすかな季節の変化
に気がつく。愛犬家ならではの気付きや子
煩悩(犬煩悩?)ぶり、笑える苦勞が詠わ
れて楽しい歌集だ。
(椎名 恵理)

山崎聡子歌集

『青い舌』

(書肆侃侃房)

『手のひらの花火』から八年ぶりに出版
された第二歌集。

ふくらんだお腹じゃまだなこのままで
生きる灼熱の夏をしらない

夕立に子どものあたま濡れさせて役に
立たない手のひらだった

この歌集のテーマは妊娠、出産だが、個
人的な出来事は日常の中だけに留まってい
ない。連続した時間の連なりではない前世
も今も来世もごたまぜになったラベルのな
い記憶が読者に示される。

花の名前に若死にをした祖母よまた私
があなたを産む春の雨
傷つけてその痕跡を照らしくる世界ま
ぶしく君を迎えよ

腕がせたら湿原あまく香り立つわたし
が生きることない生よ

わたしは子を産み、祖母を産み、人生に
追いついて追い越されて生きていく、死ん
でいく。

季節が巡るように、命も世界も巡る。そ
こにはわたしがいるようで、いないようで
それでも希望がある。
(斎藤 美衣)

坂井修一著

『森鷗外の百首』

(ふらんす堂)

鷗外の短歌作品は九七七首残されている。
だが、筆者は短歌だけでは「この巨人の抒
情詩人としての魅力を伝えきれない」とし
て本書では訳詩や創作詩など詩歌を横断し
て取り上げ解釈鑑賞を行っている。

小説などに比目にする機会の少ない鷗
外の詩歌。それに触れる喜びをまず味わい、
続く簡潔で明晰な解説に視界を開かれなが
ら鷗外の抒情の世界に分け入ってゆく。

「鷗外短歌の魅力は、世界と自分をユーモ
アたっぷり総括してみせるところにある」
「これは鷗外訳の中で最も美しい詩句
のひとつだ。」などの切れ良く、語りかけ
るような筆致に、孤高のイメージの添う鷗
外が息の通う人間として浮かび上がる。

雅文体から口語体まで自在に操る多面体
の鷗外。「翻訳が創作を凌駕して創造的だ
ある」と筆者の称える訳詩の素晴らしさと、
日露戦争従軍を詠む「うた日記」や「我百
首」などの短歌から垣間見える、一括りに
できぬ多様で奥深い人間鷗外の魅力。この
一冊を手掛かりに百首以外の詩歌を繕きた
くなる。
(鈴木千登世)